2022年度日・タイ合同セミナー

報告書

１．期　　間：２０２２年８月２５日～３１日
２．会　　場：
　１）タイ　チェンマイ県ファング地区レイサム学校
　　＜ RaiSom school, Fang District, Chiangmai, Thailand＞
　２）タイ北部ミャンマーとの国境近辺
　　ノーレイ村　＜Nor　Lae　Village＞
３．概　　要：日・タイ合同セミナーについて

本会はこれまで、2006年からタイ、ラオス、ベトナム、そして日本で4か国の医療・福祉の合同セミナーを行ってきた。その間、日・越合同セミナーのように２国間でのセミナーを行ったこともある。そして今回は初めての日・タイの2国間の第7回合同セミナーとなった。

タイでは､第１回合同セミナーとして､2006年にタイ北部メーホンソン県で行った。今回は東隣のチェンマイ県で開催した。第１回は、山岳少数民族の人たちの麻薬撲滅事業を展開している現場で、今回は、貧困から、また軍事政権による圧政から逃れて来たミャンマーからの人たちとの合同セミナーであった。ファング地区レイサム学校でミャンマーから避難して来た子供たちに小学校教育を行っている若い人たちと、そして、タイとミャンマーの国境の村で、一週間前に避難して来た人たちと面会し、状況説明を受け、質疑を交わした。

ミャンマーからの避難民は、無国籍となり、こののちの生活に対して不安はあるにせよ、かつての生活よりむしろ現状を受け入れて、平常心を保ちつつ生活をしているように見受けた。彼らにとっては、平常心を持つことこそ、幸せな心の状態であると思われた。

左：レイサム学校、迎えに来る役員たち
右：国境への検問所のあるノーレイ村

４．スケジュール表を通して、申請書に記した予定と実際の内容を簡潔に報告する。

	期　日	時　間	当初の予定	実施内容
0	8/4	14:30	事前研修　オリエンテーション　（和歌山）	学生 2 名と大学近くのカフェで説明会を行った。１）自立した行動をとること　２）時間厳

				守　3）無理をしない　などの注意と、セミナーの目的を説明した。
0	8/6	18:00	事前研修　オリエンテーション　（大阪）	各務氏に、学生に伝えた上記の内容の確認を行った。
1	8/25 （木）	09:30 11:45 15:35 19:15 20:30	タイ航空カウンター集合 （関西空港） 関空発　日本出国 バンコク着　タイ入国 自由時間 バンコク発 チェンマイ着　タクシーで移動 ホテル着(チェンマイ市) 宿泊	予定通り集合、出発 バンコクの国内線フロアーで、アイユーゴーのタイ代表ワチラ氏（コーディネーター）と合流。 ミニバスに乗りホテルへ。 ロビーで、今後の予定の確認。
2	8/26 （金）	07:30 08:30 10:00 12:00 13:00 13:30	朝食(チェンマイ市内) チェックアウト ホテル発(9 人乗りミニバス) Chiangmai－RaiSom School まで （150m、所要時間約 3 時間） 途中 FangDistrict でトイレ休憩 昼食（Fang District 内） RaiSom School へ移動 FangDistrict－RaiSomSchool （18km） RaiSom School に到着	午前：予定通り移動 途中休息したレストランで撮影した。この 6 名が日本側の参加者である。 （左から、新田、古賀、木戸、各務、福間、ワチラ） 　コロナ禍の影響から、希望はあれども、実際に参加する人は限られた。一方、国境での交流では、避難民の身の安全のため、これ以上に人数は、受け入れられなかった、と村長が語った。結果的に適切な人数での参加だったと言える。 ＜午後：レイサム学校＞ オープンセレモニー

			RaiSom School(グラウンド) Seminar ①オープニングセレモ ニーと交流	 学校の子供たちが迎えてくれて、自己紹介。奥の右端が校長。
		15:00 15:30	テーマ：文化の紹介 休憩 Seminar ② テーマ：what makes you happy	 日本の風景をスマートフォンの画面で紹介

		17:00 19:00 20:00	Fang District のゲストハウスへ移動 夕食（途中） ゲストハウス到着 宿泊(ゲストハウス) 自由時間	 子供たちに「君たちの国はどこにある？」
3	8/27 （土）	07:30 08:30 09:00 11:00

			Seminar ④ 食文化交流 ・音楽	 ソーメンを子供たちは思い思いに食べた。 授業で学んだ曲の演奏をしてくれた。 最後は子供たちが東日本大震災の復興を応援する歌「花は咲く」を歌った。

		20:00	ゲストハウスへ移動 宿泊(ゲストハウス)	

4	8/28 （日）	07:30 08:30 09:00

		16:00	**短期滞在グループ** 13:00　チェンマイへ移動 16:00 チェンマイ空港チェックイン 17:00 チェンマイ発 18:20 バンコク着 自由時間 23:59 バンコク発　タイ出国 翌朝　関空着　帰国	村の役員たちが昼食をごちそうしてくれた。 ファング村へ ホテルにて宿泊 **左記予定は今回中止となった。** (注)2，3名が月曜日の早朝着であれば、参加したいとの要望があり、セッティングした。しかし参加を決め渡航費を確認した時に、渡航費が20万円に高騰したことで不参加となった。
5	8/29 (月)	07:00 08:30 11:00 12:30 13:30 15:00 19:00 20:00	朝食(Fang District レストラン) チェンマイへ移動 MaKhamPom Art Space 訪問（Chiang Dao 地区） 昼食 ホテル着 報告会準備 夕食 報告会 宿泊（ホテル）	06:30 ゲストハウスを出発 この日は、帰国する72時間前のPCR検査に取られたため、チェンマイ病院と寺院訪問とチェンマイ動物園に時間を当てた。 後ホテルに入り、翌日に備えた。 ホテル到着後は予定通り。
6	8/30 (火)	07:30 09:00 10:00 12:30 **16:00** **17:00** 18:20 **23:59**	朝食(Fang District レストラン) ホテルチェックアウト 自由行動 昼食 チェンマイ寺院観光 **チェンマイ空港チェックイン** **チェンマイ発** バンコク着 自由時間 **バンコク発　タイ出国**	ほぼ予定通り実施した。
7	8/31 (水)		日本帰国	予定通り帰国した。

	Special Day		オンラインで事後研修	現地とのオンライン研修は、まだパソコンが設置されていないので、できなかった。
	9/10 (土)		事後研修	9/9 18:30 事後研修会を開催した。 スケジュール表を振り返り実施内容の確認を行った。 アイユーゴーは今後もこの地域での活動を持続するつもりである。 以下の報告書を参照のこと。

参加者による報告書

各務宇春
アイユーゴー　理事
立命館大学グローバル教養学部
事務長

アイユーゴーが実施した合同セミナーおよび、訪問先の現状と課題を以下の通り報告する

1．　合同セミナー実施の背景
2．　無国籍の子供を受け入れるレイサム・スクールの現状と課題
3．　ミャンマー国境に位置するノーレイ村の現状と課題

1．合同セミナー実施の背景

アイユーゴーは、「途上国の人と共に」という理念を掲げ、2001 年の設立以来、経済的、精神的な自立を支援する事業を実施してきた。その活動は、タイ、ラオス、ベトナム、マダガスカルの 4 か国で行われ、支援内容は、（トイレや小規模ダムの設置を通じた）生活レベルの向上、環境保全、教育支援の 3 つの柱からなる。いずれも現地住民の考える幸せ、ニーズを尊重し、また各国で活動をともに担う個人や団体（カウンターパート）との意見交換を十分に行ったうえで、実施してきた。これらの取り組みは現地住民からの評価を得ているが、特筆すべき点は活動をともに担ってきたカウンターパートとの間で確固たる信頼関係が築かれ、その活動が長年継続されてきた点にあると考えている。この背景にあるのは、カウンターパートが、アイユーゴーの活動方針を評価しているからであろう。

このような活動を行ってきたアイユーゴーは、近年、「合同セミナー」の実施に注力をしている。日本からの渡航者、現地カウンターパート、および現地住民が、ともに幸せな暮らしや地域社会、国際社会のありようを考えようとするもので、まさに「途上国の人とともに」という理念を体現した取り組みとなっている。

今回実施した、タイ北部における「合同セミナー」もこの一環である。アイユーゴーは、2002 年

からタイ北西部、ミャンマー国境にあるメーホーソンにおいて、小学校や職業訓練センターの建設を実施した。この活動において、アイユーゴーの事業推進に尽力したのがワチラ氏（本人希望により通称名表記）であり、今回の合同セミナーは、ワチラ氏の尽力とネットワークによって実施された。

2022 年合同セミナーは、同じタイ北部にあるチェンマイ県ファング地区で活動するレイサム・スクールの職員、生徒とともに実施した。以前、アイユーゴーが事業を実施したメーホーソン県に程近いタイ北部、ミャンマー国境に接する地域ではあるものの、300 キロほど北に位置し、車の移動でも約 6 時間程度を要する場所である。アイユーゴーの関係者はもちろん、ワチラ氏にとっても初訪問となる地域であった。

ワチラ氏（左）と新田アイユーゴー代表（右）

２．無国籍の子供を受け入れるレイサム・スクールの現状と課題

今回の合同セミナーの主たる訪問先は、チェンマイ県ファング地区（Fang District）にあるレイサム・スクール（Raisom School）。この学校は、ミャンマーからの難民であり、タイ国内においては無国籍の子供たちを受け入れる学校である。日本の学校教育でいう年少保育から小学校 4 年生までの教育課程を目安に設置され、訪問時には約 170 名の生徒が在籍していた。この地域は、ミャンマーと接することから、経済的な豊かさを求める「経済難民」とミャンマー国内における戦闘から逃避してきた「政治難民」が多く居住し、多くの大人はオレンジ農園などにおいて労働に従事し、その子供たちがこの学校に通う。タイ国籍を認められていない「無国籍（stateless）のため、地域の公立小学校に通うことができない。

この学校は、タイの複数の地域で活動を行うミラー財団（The Mirror Foundation）によって設置、運営されており、学校教育は 9 名の先生によって行われていた。公立学校の教諭資格を持たない先生で、それぞれ担当学年を持つほか、農業指導、音楽指導などの特定分野の担当も担うほか、給食

調理、学校広報など、学校行政も分担して行われていた。

教職員との交流においては、学校の現状と課題を聞くことができたが、日本であれ、タイであれ通常の地域の小学校にはない、課題が多数出された。第 1 に、この学校が公的に認められていない学校によるものである。学校運営費用、とりわけ教職員人件費を政府から得ることができず、財団予算によって賄わなければならない。第 2 に子供たちの在籍期間に関わる課題。農業従事者の子供たちは、雇用主の都合により、点々と居住地を変更することになる。多くの子供たちが短期間でこの学校を離れていくようで、年間通じてこの学校に在籍する子供は多くない（校長）とのこと。突然来なくなる生徒もいるようで、この点が指導上難しいという。第 3 に、年齢相当の教育ができないという課題。過去の教育歴も様々で、例えば 12 歳であっても小学校 1 年生の教育が必要な生徒がいるという。恥ずかしさもあり、どのように向き合うかが課題だという。第 4 に、言語の問題も大きいようだ。タイ語で教育を行うが、全ての子供がタイ語を理解できるわけではなく、4 つ程度のミャンマーの少数言語も必要に応じて使うという。教職員の一部に少数民族の言語を理解できる先生がいたが、それでもすべての言語を使えるわけではないようで、子供たちに通訳をお願いするのだという。

この学校の先生は、20～40 代。20 代の若い先生も多い。なぜこのような大変な仕事を選んだのか、という質問に、目の前の課題を無視できなかったという回答（複数の先生）は、大変印象的であった。5 年後、なにが改善されているとよいのか、という質問に対しては、政府からの支援が得られるようになること、絵の具など教育用の道具が公立の小学校と同じように行きわたること、多くの子供を受け入れるため学校を拡大し、先生も増やしたいという声も出されたが、校長からは「5 年後は考えられない。できること、目の前のことをしていきたい。子供たちが幸せでいつも笑ってくれている学校であり続けたい」という話があり、この学校の課題の大きさと、この学校の教職員チームの高い意識を感じ取ることができた。

なお、今回、この学校にアイユーゴーが図書館を建設し、その完成式典も同時に行われた。この図書館を通じて、子供たちに視野を広げてもらおうという思いからである。今後、この学校が抱える課題に、アイユーゴーが単体で解決できる課題は少ないが、目の前の課題をなんとかしよう、子供たちの幸せのためにできることを続けようという、教職員チームから学ぶ点は多い。今後もアイユーゴーがこの学校から学びながら、私たちにできることがあれば協力していくという関わりが望ましいと感じた。

３．　ミャンマー国境に位置するノーレイ村の現状と課題

レイサム・スクール校長（ミラー財団の役員でもある）の計らいにより、ミャンマー国境のノーレイ（Nor Lae）村を訪問した。レイサム・スクールから車で１時間、山道を登り、両国の国境警備隊が駐屯する地にその村はあった。レイサム・スクールは比較的、経済難民（いわばミャンマーからの出稼ぎ労働者）が多く、すでにタイ国内に生活基盤を設けつつある住民の子供なので、緊急を要するような緊張感はなかったが、ノーレイ村は国境を越えて避難してきたばかりの人たちから話を聞くなど、緊迫感のある訪問となった。撮影した写真の公開は禁じられ、また聞き取った内容も個人が特定できる形で公開しないことを約束したうえでの対面となった。

訪問後、すぐにミャンマーから入国して 1 週間前後という人たちが集まってくれた。人口 1,600 人、250 世帯の村に、いま次々と難民が押し寄せているという。この日も 10 代後半から 20 代前半の男女約 10 名が集まったが、基本的には激化する戦闘に巻き込まれるのを避けるため、また徴兵を逃れるために、家を離れて数日間歩いたという。なかには、1 歳の子供を抱えた 10 代の若い夫婦もいた。

ノーレイ村で、この難民を支援する若い男性役員が難民からの話を聞きながら整理した内容によれば、2021 年のミャンマー政変後、少数民族間の対立も激しくなり、逃げてきた人たちが巻き込まれている戦闘は、政府軍との戦闘ではなく、少数民族間の戦闘によるものでないかとの見立てであった。ただ、逃げてきたばかりの人たちも、ミャンマー国内全体で何が起きているのか把握ができていないようで、とにかく身の安全を保つために、タイに向かったという話があった。

この村は、ミャンマー国境に位置していることから、昨年のミャンマー政変以前から少数民族の流入があるのだという。すでに村に定着している人のなかにも、数十年前にミャンマーから逃れてきたという人たちも多いようで、村全体として難民を支えているのだという。タイ政府もこの村の中にいる限りは入国を認める方針。一方で村から出ることは認められていない。

この村に到着した避難民は、まず 1 人 2 着の衣服が村から提供されたうえで、村内に引き受け手を探し、農業などへの労働力を提供する代わりに、食事や寝る場所を提供されるのだという。ただ、いつまでこの場所にいられるのかは、わからない。難民たちには、残してきた父母など家族に会いたい気持ちもあり、帰りたい気持ちもある、一方でこの場所でお金を稼いで暮らしていきたいという気持ちもある、とそれぞれに様々な思いが述べられ、複雑な心のうちが吐露されていた。

少数民族として生まれ、身の危険を感じて居住地を離れる決意をし、険しい山道を夜間に歩き、国境を越えてたどり着いたばかりの人たちに、何ができるのか。終始自問しながら、対面や村内の視察を行ったが、この思いは私ばかりでなく、同行したバンコク在住のワチラ氏もファング在住のレイサム・スクール校長も同じだったようで、その日の夕方、ファング地区に戻った後の振り返りで、同じ感想が聞かれた。

アイユーゴーの方針としては、この二人の思いと同じ思いを持っているということをカウンターパートである二人に示すことであろう。彼らとともに悩み、できることがあればそれを一緒に進めていく。そのことが、アイユーゴーがこれまでやってきたことであり、彼から望まれていることで

はないかと思う。すぐにできることは限られるが、こういった悩みや課題意識を共有していれば、何かしらのタイミングで新しい取り組みを進められるのではないかと思う。（了）

ノーレイの民家。民家裏の崖下、奥に見える山々はミャンマー。

日・タイ合同セミナー参加報告書

福間眞子

アイユーゴー・タイ代表であるワチラ氏は主人の２５年来の友人で、セミナーに通訳として同行しないかと、声をかけていただきました。タイ・チェンマイに暮らして１６年あまり、伝統文化や芸術に興味がありその関連で山奥に住む少数民族の村を訪れる機会などはありましたが、NGO 支援事業の現場は今回が初めてでした。

セミナーの開催地である、Rai Som School へ向かう車中で、タイに到着して間もない参加者の学生さんたちが、「電線も舗装道路も整備されている」、「４年前に教科書で習ったものとは全然様子が違う」と感心している様子をみて、私はたいへん驚いてしまいました。これだけネットが普及し情報が溢れている時代においても、外から見たタイのイメージというのはまだまだ発展途上国なのだろうか？　チェンマイの街はこの１０年くらいで急速に発展し、日本ともほぼ変わらぬ便利な生活ができるようになり、人々にも活力を感じます。しかしその反面、様々な問題も浮き彫りになってきています。生活水準の向上にともない、いわゆる３K 職種で人材が不足し、ミャンマーからの出稼ぎ労働者を低賃金で雇い労働力を確保している。タイでも外国人出稼ぎ労働力なくしては成り立たない状況になりつつあります。

Rai Som School が受け入れている子供たちの両親も多くがミャンマーからの出稼ぎ労働者であり、この先タイで社会生活を送れるのか、ミャンマーに帰れるのかもわからない中、多くは中等教育に進まず家族の生活を支えるため働きに出るという状況です。Rai Som School の先生達は、子供たちにタイの義務教育をそのまま受けさせることに戸惑いを感じ、むしろ社会生活に必要な言葉の知識や技能を身につけることが大切だと考えています。それでも今回のセミナーに参加してくれた子供たちは笑顔で将来の夢や幸せとはなにか、話してくれました。

多様化する国際社会での支援活動を考える上で大切なことは、困った人たちがいるコミュニティーをベースとし、その支援が一方的な押しつけになったり、自活力を損ねたりしないよう共に考え、その場所にあった方法を創造し実践していくこと。また一つの NGO 事業の中にも様々な立場の組織や人が関わる重層的な構造をなしており、「政府の支援が届かない地域への支援活動」、「参加型自立支援」を実現、持続していくためにはその地域や組織が関連している国や政府機関とのネゴシエーションが重要であるということも改めて知ることができました。それぞれの立場で様々な困難や葛藤があると思いますが、皆さんライフワークとして自分の役割を理解し現場に向き合い、真摯に取り組んでおられる姿がたいへん印象的でした。

通訳としてではありましたが、普段なかなか出会う機会のない方々から刺激を受け充実した時間を過ごすことができました。外国に長く暮らしていると、「日本では～」、「タイ人は～」とあたかもその国の代弁者になったような話をすることがあります。自分の中に無意識の内に蓄積されてきた既成概念に捉われることなく、人と人としてのコミュニケーションを大切に、タイでの生活経験を活かし相互理解を深めるために少しでも役に立つことができたらと思います。ありがとうございました。（了）

日本国内を出て海外へ

木戸啓介　近畿大学生物理工学部１年

私は今回初めて日本を出て海外に行った。まず初めに関西国際空港の国際線に初めて足を踏み入れた。今までは国内線しか利用したことしかなかった。国内線とは大きく異なる点がいくつかあり、なかでも手荷物検査が終わってからが長いと感じた。この時間の長さにより日本を出て海外へと行くという実感が高まったと思う。そして、約 5 時間半かけてバンコク国際空港へ到着した。初めて、異国に足を踏み入れたときは少し感動した。空港の中の案内板は「日本語+英語」ではなく「タイ語+英語」になっており、私自身全くタイ語ができないので英語表記に多々助けられた。入国審査を無事終え、お金を「日本円→バーツ」へと換金したが。今は円安のせいで「1 バーツ＝4 円」に近かった。初めての海外での買い物はローソンで水を買った。6 バーツぐらいで日本円に直すと 24 円。日本の水よりはるかに安くてとても驚いた。

2 日目からチェンマイ市から約 150 km離れたファンにある「レイサムスクール」に行き、図書館の開校

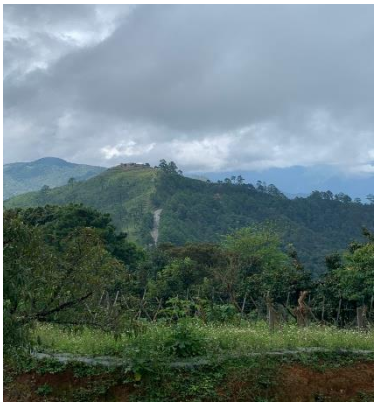
のセレモニーに参加した。
チェンマイ市から移動中に、インフラの整備は届いてはいたが電柱を見るとぐちゃぐちゃであったのが衝撃的であった。そして「レイサムスクール」に着いて盛大な歓迎を受けてとても感激を受けた。

3日目はレイサムスクールの子どもたちと先生と我々でセミナーを行った。私が子供たちに聞いた質問で「将来、どうしたいか」という質問に対して多くの回答は「家族と一緒に幸せに暮らしたい」であった。私は具体的な職業を子どもたちが言うと思っていたがほとんどの子が家族思いであることに非常に驚いた。日本の子どもたちなら「お金持ちになりたい」など欲望に満ち溢れたことをいうだろう。私自身もそういうに違いない。子どもたちからの笑顔がとてもうれしく質問がしやすかった。私は日本の子どもたちとなんら変わらないと思った。少しだけ悔しかったのは私自身、タイ語が話せなかったことだ。次回、行く機会があればそのときまでに今回よりも少しでも多くタイ語を話したいと思った。

そして夕方になると食文化交流ということで我々は日本食である「そうめん」をごちそうした。レイサムスクールの子たちにはおそらく初めて食べる味であったと思う。食文化交流が終わってからは子どもたちから歌のプレゼントがあり、我々もお返しということで日本の歌を歌った。子どもたちからの最後の歌は途中から日本語が入っていたことに非常に驚き、とても感動しました。少しでも子どもたちと繋がることができた。

4 日目はミャンマーと国境を接する村へ先生たちと一緒に行った。ミャンマーの国内がとても不安定だということがよく分かった。国境はものすごい警備だろうと予想していたが意外と柵がある程度で厳重な警備でなかったことに少し驚いた。

中央の柵の手前がタイ


中央の山頂はミャンマー軍の監視場

約 1 週間のタイへの合同セミナーは教科書には載っていない未知の世界を知ることができ、私自身とても勉強になった。こういった機会を作ってくれた「アイユーゴー」の方たちに感謝したいと思います。（了）

私が今回のタイへの研修で学んだことは４つである

古賀正悟　近畿大学生物理工学部１年

1. 交通インフラの整備について

交通インフラの整備が予想以上に行われていることに驚いた。チェンマイ市の中心はすでに車道も歩道も整備がほとんど完了しており、車での移動が多い需要に道路の整備が追い付いていると感じた。実際に今回の研修中は車での移動が多かったが、山中にも市内と同じく舗装済みの道路があることに驚いた。私が持っていた「アジア諸国は貧乏だ」という先入観は取り払われた。

2. 今回の研修で訪れた学校について

実際に山間部の学校などを訪れ、子供たちは衛生観念と携帯電話を備えていて日本の子供と同じだと感じた。日本の部活のように午後から好きなことを学べるシステムも日本と似ていると感じた。しかし子供が話せる言語の種類が異なっていること、親の働く場所が不安定でそれに合わせて子供も移動し、それにより子供が安定して学校に通えなくなることなどの日本に居ては見えにくい問題がタイで見ることができた。これらの問題を解決することがいま求められることだと感じた。誰もが最初は読み書きができないが、学校に通うことで出来るようになる。科学技術も使い方が分からなければ無いのと同じだ。学ぶことは生きることだと思うので、生徒には学業に励んでほしいと思う。

3. 難民や出稼ぎ労働者について

難民や出稼ぎ労働者について学んだ。タイでは陸続きに国が点在しているために難民や労働者が島国の日本に比べて流れてきやすい。日本では地方の過疎化が深刻化している。タイでは北部の山間

部に継続的に人が流れて、その支援が課題にもなっているが過疎化の抑止になっていることは魅力だと感じた。現地ではイモやイチゴなどで生計を立てていたが単価が安く大量生産が必要で、そこに労働者として難民を受け入れていた。日本のブランド化などで商品価値を高めて収益を増やす手法を取り入れるなどが必要だと思った。

4. スマートフォンの利便性について

最後に今回の研修で改めてスマートフォンの利便性の高さに驚いた。スマートフォンは１台で様々なことができる、実際に研修中に翻訳アプリを用いてタイ語を話せない私と、日本語を話せないタイ人とで会話ができた。翻訳アプリにより言語の壁はかなり低くなっていると思う。ネットの活用が今後の鍵だと思う。（了）

チェンマイ市内での食事
スプーンは直置きしない

山間部の道路は整備済みだが
何もない

山越えの道も整備されていた

学校に設置された手製？　の橋

コストコのようなスーパーにて
大量の肉がむき出しで陳列

チェンマイ市内の日本食店